

大学におけるヌーヴォー・ロマンとクロード・シモン-ヌーヴォー・ロマン「内部爆発」以降より-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2011-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増田, 晴美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/11158

大学におけるヌーヴォー・ロマンとクロード・シモン
——ヌーヴォー・ロマン「内部爆発」以降より——

L'Université et le Nouveau Roman, l'Université et Claude Simon
——depuis "l'implosion" du Nouveau Roman——

博士後期課程 仏文学専攻 1990年度入学

増 田 晴 美

Harumi Masuda

1. はじめに

1989年の『アカシア』*L'Acacia* 刊行以来、クロード・シモン Claude SIMON (1913~) は、いわゆる小説としてのテキストは発表していない。シモンの活動で我々が目にすることができるのは、もっぱら、写真集¹⁾や画家デュビュッフェとの往復書簡²⁾の刊行といった、小説以外の仕事や、あるいはジャーナリスティックな発言——1995年9月21日、ル・モンド紙に掲載された、核抑止論に関する大江健三郎への「手紙」³⁾——に限られている。

もっとも、小説の「断片」というかたちであれば、我々は、シモンの手になるテキストに接することができる。1993年にクイーンズ大学（カナダ）で行われたクロード・シモン・シンポジウムの模様が、2年後、『*Les sites de l'écriture*』のタイトルで一冊の本となったとき、そこには“公園” *Les jardins publics* という短いテキストが付された⁴⁾。また、1996年の「ランフィニ」誌第56号の巻頭は、“ある一戯曲の公開レクチャー” *Lecture publique d'une pièce de théâtre* と題されたシモンのテキストが飾っている⁵⁾。いずれも、作家の自伝的要素の色濃い断章を連ねた10ページ前後のものである。

ところで、本稿は、ヌーヴォー・ロマン、そしてクロード・シモンが、果たして大学の現状においてどのように受容されているのだろうか、という疑問の上に成立している。この疑問に、現在の、主にフランスにおける大学の文学研究（特に文学教育）の実態を把握することから、答えを与えることを目的としたのである。では、この問いはどこから来るのか。それは、1995年発表のテキスト“公園”に端を発している。

“公園”の中の一断片は、1971年7月20日から30日にかけてスリジーで行われたヌーヴォー・ロマン・シンポジウム的一幕を、シモンその人を想起させる「S.」という人物の回顧というかたちをとって再現している。ロブ・グリエやジャン・リカルドゥーらの討論の一部が、シンポジウムを収録したテキスト『Nouveau Roman : hier, aujourd'hui』(1971)⁶⁾から、ほぼ忠実に引用されている。

既存のテキストや資料に向けたシモンのフェティッシュは、『農事詩』*Les Géorgiques* (1980) を始めとして、我々に馴染み深いところである。従って、引用の手法そのものは、もはや驚くにはあたらない。問題なのは、この“公園”の一節が、今日のシモン研究という、些かアカデミックな領域の実情に、あらためて我々の目を向けさせる強度を持っていることなのである。それはどういうことか。以下、簡単に説明したい。

2. 1971年ヌーヴォー・ロマン・シンポジウムと大学アカデミズム

スリジーのシンポジウムは、ヌーヴォー・ロマンの理論的総括への第一歩であると同時に、何よりも、小説の刷新への「大学人」の強い関心を浮き彫りにするものとして、記念碑的なものであった。主宰はリカルドゥーとF.v.ロッセム・グイヨン (Françoise van ROSSUM-GUYON)。参加者は、その後のシモン研究に確固たる地位を築くL.ダレンバック (Lucien DÄLLENBACH)、ゴールドマン派の社会学的批評を継承してゆくJ.レナルト (Jacques LEENHARDT) など錚々たる顔ぶれであり、そうした研究者たちが、作家たちと共に、テキストの自立性を巡って、討論を重ねるのである。

ところで、シモンは、シンポジウムの事前に、自分が受け取った一通の手紙を関係者に公開する。それは、『フランドルへの道』*La Route des Flandres* (1960) の読者である元軍人からのもので、「主人公の体験は、まさに私が所属していた部隊で起こった現実のことだ」と証言するものなのだ。討論の焦点が、現実の再現という「幻想」をいかに処理するかにかかっているまさにそのとき、こともあろうに、この手紙は、小説がテキスト「外」の現実性に依拠している事実をほのめかしてしまう。“公園”が掬い取っているのは、この厄介な手紙を前にした討論者たちの苛立ちと、手紙の公開という振舞いに出た「S.」自身の省察に他ならない。「このような資料を公開したことで、S.はこの文学運動の信奉者たちがよりどころとしている理論に違反してはいなかったか？このグループの研究を司る思想的共同体から自ら脱退したのではなかったか？⁷⁾」

ここで「思想的共同体」と呼ばれているものが、“ヌーヴォー・ロマン”の一語でくくられ、奇妙な連帯意識の共有を迫られた作家たちであると同時に、その理論的探究に積極的に乗り出した、いわゆる「大学アカデミズム」であることは、シンポジウムの性質上、疑いの余地がないだろう。そして、その大学アカデミズムは、“公園”において揶揄されているくらいがなくもないのである。

「この共同体の一員として、彼 [=S.] を迎え入れるべきだったのか、それとも、偶然に道中で一緒になった怪しげな“旅の道連れ”とみなすべきだったのか？⁸⁾」——当時のシンポジウムから既

に四半世紀が過ぎた現在、「S.」はそんなふうに言いなすわけだが、さて、実際のところはどうか。シモンはアカデミズムから閉め出された作家というべきなのかどうか。

このテキスト「外」の事実を明らかにすることは、結果的に、“公園”の一断片が実に多角的な批評的機能を帯びている可能性の認知ともなるかもしれない。

ともあれ、以下、ヌーヴォー・ロマンと大学研究の素描から始めよう。

3. ヌーヴォー・ロマンの「内部爆発」から大学教育への定着まで

「ストラスブールやスリジエのシンポジウムに、大学人たちが出席し、[ランソン派の実証主義とは異なる、実存主義的、マルクス主義的、精神分析的、あるいは現象学的な]“解釈”の批評を実践し、ヌーヴォー・ロマンを知らしめることに貢献していたにも関わらず、大学というものが、相変わらず、実証主義的・決定論的批評とか、術学的、拒絶的といったイメージで通っていたということには驚いてしまう⁹⁾」。

1970年前後の大学系批評に関し、C.オリオル・ボワイエ (Claudette ORIOL-BOYER) は、『Nouveau Roman et discours critique』(1990)の中でこのように語っている。ボワイエのテキストは、ヌーヴォー・ロマンの社会的受容の歴史を、40年代から90年にまで及ぶ丹念な文献調査によって描き出しているという意味で資料的価値が高いものだが、とりわけ、大学教育とヌーヴォー・ロマンの関係に力を入れている点が興味深い。「若い研究者たちは、現代文学を対象としたことでキャリアをストップされてしまう」といったロブ＝グリエの発言を引用する¹⁰⁾一方で、ボワイエは、1972年以降、学生向けのテキスト（あるいは教科書）を通じて、ヌーヴォー・ロマンが大学に入り込み、90年に至ったという事実を明言している。

一口に学生向けのテキストと言っても、多種多様である。文学史の教科書の数ページのみをヌーヴォー・ロマンに割いたもの¹¹⁾もあるし、一冊まるまるをヌーヴォー・ロマンの解説に当てたもの¹²⁾もある。ナラトロジーなどのテキスト分析の方法論の応用として、ヌーヴォー・ロマンのテキストが使用されるケース¹³⁾ある。いずれにせよ、大学には、「新しい小説」によって学生を啓蒙するための、教育的な言説が普及する。

このように、ヌーヴォー・ロマンの大学への定着は、今日では常識的なことである。ヌーヴォー・ロマンが小説ジャンルにおいて提起したプロブレマティックは、シュールレアリスムや実存主義のイデオロギーと並んで、まずは知識として消化されなければならない。実際、ヌーヴォー・ロマンの「手引書」として最新のもの(1996年刊行)であるR.M.アルマン (Roger-Michel ALLEMAND) の『Le Nouveau Roman』は、「ヌーヴォー・ロマンは、今や、いかなる中・高校生や大学生であれ知る義務のある文学の一時代である¹⁴⁾」とはっきり前置きしている。

ところで、このアルマンのテキストは、解説書ではありながらいわゆる教科書的な言説とは一線を画しており、その点異色である。具体的なテキスト分析を排し、作家たちの発言、文壇や出版業界のジャーナリスティックなエピソードなどを豊富に織り込み、通俗をも敢えて辞さないという趣

なのである。もちろん、テキストから離れた安易な文壇スキャンダルに読者の興味を引きつけるきらいがまったくないとは言えない。しかし、近年、ともすれば高踏的なテキスト理論で武装することのみに専念しがちなヌーヴォー・ロマンの解説書と異なり、公的なマニフェストを持たない「動体 (mouvance)¹⁵⁾」であるヌーヴォー・ロマンがはらむ、ある種の危うさ、つかみどころのなさを、その作品成立に関わる社会的背景のうちに克明に浮かび上がらせてもいる。

例えば、問題のシンポジウムは、次のようにコメントされている。

「リカルドゥーは、大学研究をバックとして（共同主宰者はロッセム・グイヨンなのだ）、現代性を掲げるすべての作家をあまねくスリジーに招き、シンポジウムを“ヌーヴォー・ロマン、昨日・今日”と名付け、ここで一つの総決算を打ち出すと同時に、[ヌーヴォー・ロマン]初期のネオ・ロマネスクな試みと、それに平行する、あるいはそれ以後の、他の作家たちによる小説形式の刷新との連続性を明らかにする意味を込める。この企画は見事なものだ。[...]弱ってしまうのは、リカルドゥーが、シンポジウムで引き出された分析はヌーヴォー・ロマンの定義の初歩的「規則 (règles)」となるだろうと主張することなのだ。この規範的見解は参加者の意にまったくそぐわず、大多数は異にはまったと感じる。自分の批評的所見を体系化することで、この主宰者は仲間連中を怒らせ、討論は荒れるのである」——そして「参加者は、こんなあやまち二度と繰り返すまいと固く心に誓って解散する¹⁶⁾」。

我々は、ときにはいくぶん三面記事的と言えなくもないアルマンの記述によって、50年代に出現したヌーヴォー・ロマンと呼ばれる諸作品が、なぜ、小説理論として成熟を見る60年代に早くも分散し始め、70年代初頭に決定的に「内部爆発 (implosion)¹⁷⁾」せざるを得なかったかということ、様々な事情のもとにあらためて実感するのである。

また、同時に我々は、ヌーヴォー・ロマンの大学への進出は、先述したオリオル・ボワイエのテキストとの関連で言えば、まさにその終わりと共に始まっているということ、再認識することとなる。ちなみに、シンポジウムでは些か悪役めいたリカルドゥーだが、皮肉なことに、彼のテキスト理論は、方法論としてその後アカデミズムに完全に定着する。リカルドゥー当人は、逆に、80年代後半よりアカデミズムを離れてスリジーでセミナー「Textique」を定期的開設、1996年夏にもシンポジウムを主宰し、健在ぶりを示しているという事実も、特記しておくべきだろう。

さて、ここで、70年代以降に提出された博士論文¹⁸⁾の数から、ヌーヴォー・ロマンの受容の実態をうかがってみよう。アルマンがヌーヴォー・ロマン作家として挙げる10人¹⁹⁾について、便宜上、5年ごとに区切って以下に示してみる。

作家名 \ 年	～75	～80	～85	～90	～現在	計
ベケット	15	6	8	7	15	51
ビュトール	3	6	10	5	5	29
デュラス	3	5	8	12	14	42

パンジェ	1		1	3	3	8
モーリャック						0
オリエ						0
リカルドゥー		2	1			3
R. グリエ	7	10	9	4	4	34
サロート	4	2	1	2	5	14
シモン	2	1	4	3	15	25

今、これらの論文すべてについて詳述する紙幅はないが、ヌーヴォー・ロマンは今や「古典」だといった言い回しが決して大袈裟ではなく、研究対象として多くの可能性を用意しているのだということが、上の数値から見てとれるだろう（尚、ヌーヴォー・ロマン作家という枠組みを遙かに超えているベケットは別格である）。ただし、各々の論文が、必ずしもヌーヴォー・ロマンそのものを中心概念として作成されているわけではないということには注意しておく必要がある。「博士論文」という性格上、これは当然とも言えるのだが、ある方法論の選択（言語学的アプローチ、フェミニズム批評、物語の構造分析、社会学批評、映像論、比較文学・文化論など）によって、作家の「個性」を強調する傾向が目立ち、ヌーヴォー・ロマンそのものを扱うといった考察は少数派である。

このことは、「ヌーヴォー・ロマン」をタイトルとした博士論文²⁰⁾に着目してみてもわかる。この種の論文は、72年以降、22本を数える。そのうち、いわゆるフランスの《ヌーヴォー・ロマン》を理論的に考察したものは、実質的には10本——しかも80年代後半から現在までに提出されたものはわずか1本——である。半数以上は、ラテン・アメリカ文学やマグレブ文学、あるいはアフリカ文学との比較文学論的なアプローチのために援用されているのが実情である。

いずれにしても、アカデミズムでは現存の作家を研究対象とはしないとされた風潮は、今や神話的領域に入ったものと言えるだろう。

4. シモン研究——教育の現場を中心に

さて、ここで、クロード・シモンそのひとに焦点を移してみることにしよう。

シモンに関する批評の活性化は、『農事詩』が1980年に発表された直後、1981年に「クリティック」誌が大々的なシモン特集を組んだ²¹⁾ときから既に始まっている。それにしても、1985年に世界的な規模でジャーナリズムを騒がせた、シモンへのノーベル賞授与という事件は、その後のシモン研究に拍車をかけずにおこななかったものと思われる。博士論文数を見た場合、90年代以降、シモンを対象としたものが飛躍的に増えているのは、あながち偶然でもないだろう。論文で用いられているアプローチの方法にしても、シモンの小説における人物の機能を物語構造的に問うもの、受容理論からテキストと読者の関係を問うもの、絵画との関係を問うもの、あるいは20世紀の芸術史的コンテク

ストに位置づけてみるものなど、まさしく多岐に渡っている。そして、これらの博士号取得者の中から、シモンのモノグラフを刊行²²⁾し、関連雑誌でデビュー²³⁾する若手研究者が続々と誕生している。

こうした傾向は、大学教育のレベルでのシモンの受容に、多少の影響を及ぼしているのではないだろうか。かつて、シモンのテキストは、教科書に採録されることこそあっても、例えばロブ＝グリエの作品のように²⁴⁾、学生用の解説書のシリーズの一冊として名を連ねることはなかった。つまり、作家の文体の個性や作品を読み解く際のキー概念、あるいはビブリオグラフィーや関連図書などを知る上で、ごく手軽に参照できるテキストというものが、シモンの場合存在していなかったのである。ところが、1996年、『農事詩』の解説書²⁵⁾が登場した。ヌーヴォー・ロマンやシモンのエクリチュールの素描、ヴェルギリウスやジョージ・オーウェルのテキストとの関連性、分析メソッド(L.ダレンバックの言うアナロジーの原理)、さらには「家」や「歴史」といった主題などが、大学生向けにコンパクトにまとめられている。

また、ここ数年の大学の授業の動向で言えば、パリ第8大学の1996-1997年度の前期の授業で、修士課程の学生を対象に「クロード・シモン：読書の快樂と理論的アプローチ²⁶⁾」が開設されている(ちなみに後期はロブ＝グリエとなる)。講義は、2時間30分の半分を、ジュネットからヴァンサン・ジュヴに至るテキスト理論、そしてリカルドゥーのヌーヴォー・ロマン理論の要点を学生に把握させ、残りの半分を、ときにはそれを援用しながら、『歴史』*Histoire* (1967)の読解にあてるというもの。学生は、シモンの言葉が紡ぎ出すイメージの連鎖の通底に「隠された意味」があるとする心理主義的読解に、どうしても傾きがちなのだが、それを回避させ、あくまでシニフィアンの側に注意を払わせるための、謂わば一種の「訓練」的な作業である。

一方、文学の教授法として、テキストを「読むこと」と「書くこと」の同時的な実践を提唱する雑誌「TEM (Texte en Main)」の第7号(1988-89)には、一風変わった授業風景が、「シモンと共に書く」というタイトルのもとに報告されている²⁷⁾。シモン研究者であるG.ニューマン(Guy NEUMANN)が、マッカーリー大学(シドニー、オーストラリア)の修士課程・博士課程の学生を対象に行ったものである。シモンの『三枚続きの絵』*Triptyque* (1973)で用いられている手法(中心紋、言葉遊び、アナグラムなど)を分析した後、それを模倣(応用)して、とあるアーストラリア民謡の一節を数ページのフィクションに発展させるという試みがなされている。一見、奇妙奇天烈だが、この実験的授業は、所与のテキストに対する批評(レクチュール)と、それが生み出す新しいテキスト(エクリチュール)との間にあるダイナミズムを学生に体験させることを、何よりも重視した結果の試みであるという。

以上、大学の「講義」というアカデミズムの一部に話が些か偏ったが、シモンが大学教育の各課程において確実に受け入れられているということは、十二分に窺えるだろう。

ここで、シモン研究一般についても、一言触れておきたい。

現在のところ、明確に「クロード・シモン研究会」と呼びうる団体は存在していない。しかし、

シモン研究の体系化を推進しようとする動きは確実に生まれている。

1994年に、「La Revue des Lettres Modernes」の一冊としてシモン特集²⁸⁾を組んだR.サルコナーク (Ralph SARKONAK) は、シモン研究に欠けているのは、読者・研究者の情報交換の場となりうる、定期的に刊行される研究誌であると指摘し、自らの研究室 (カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学) を拠点として、シモン特集号を継続的に発行してゆく姿勢を示している。

サルコナークは、さらに、コンコルダンスの作成とそのデータ・ベース化、自筆原稿の研究、シモン全集の発刊、シモン研究関連文献のヒブリオグラフィーの作成などの必要性を説く。実際、課題は山積していると言える。例えば、自筆原稿を用いたテキスト・クリティックにしる、必ずしも、シモン当人の原稿だけを重要視するわけにはいかないだろう。1994年、テキスト生成 (ジェネティック) 研究の中心誌「ゲネシス」は、メルロ・ポンティが、1961年3月16日、コレージュ・ド・フランスでシモンについて行った講義のノートを読解し、ファクシミリ原稿と共に発表している²⁹⁾。こうした資料をどのように扱うのか。また、今日のフランスの大学や図書館では、フランスと海外の雑誌の検索性CD-ROM「Myriade」、人文社会系の雑誌掲載論文の検索性CD-ROM「Francis」等の活用により、ここ数十年来の文献が瞬時に把握可能であるし、インターネットでは、ブリストを始め様々な作家のホームページが設けられているといった有り様である。こうした状況下にある以上、作家研究の形態は、当然それにふさわしく調整されていくこととなるだろう。

5. 結びにかえて——再び1971年ヌーヴォー・ロマン・シンポジウムへ

以上、我々は、大学教育の現状に焦点をあてながら、現在、ヌーヴォー・ロマン、そしてクロード・シモンが、「大学アカデミズム」において、専門研究の対象、文学の一般教養上の素材として、既に定着していることを確認した。

このような事態を認知したのちに、再び“公園”のテキストに戻ると、「S.」のつぶやきにあらわれる「思想的共同体」と「怪しげな旅の道連れ」の対立という構図は、何やらアナクロニクなカリカチュアに見えてくることだろう。今更なぜこんなことを、とこちらがつぶやきたくなるのだ。

しかし、実際のクロード・シモンという作家は、なかなか一筋縄ではいかない「狡賢さ」を持っている。最後になるが、ここで、現在のシモン研究から引き出される事実を、もう一つ、エピソード的に付け加えておく。

シモンの公開した、元軍人の一通の手紙が、スリジーのシンポジウムの参加者の間に、ある気不味さを生じさせたことは、最初に述べた通りである。さて「S.」の懸念には及ばず、シモンは「思想的共同体」から排斥されはしなかった。それどころか、この行為は、その後のシモン批評を、はるかに豊かなものとするのである。

1990年、雑誌「Revue des Sciences Humaines」第220号のクロード・シモン特集に、A.C.パフ (Anthony Cheal PUGH) は、「指示機能 (référence) への道」と題した論考を寄せた³⁰⁾。そこには、問題の手紙が再録されていると同時に、この真偽を問い合わせたパフへのシモン自身の返答が、

自筆原稿（1984年に書かれたもの）のかたちで掲載されている。そして、『フランドルへの道』は、まさに、その元軍人が——シモンと共に——所属していた部隊をモデルとしており、作品中のド・レシャック將軍は、実在の「レイ連隊長」に他ならないことが証明されているのである。

周知のように、シモンは、自分の小説が実体験に基づいていることを公言している。しかし、その実体験を、研究の場で「資料」として公表し、自らすすんで「実証」してゆくという行為は、単なる「コメント」とは異なり、すぐれて意識的な批評的選択として理解されるべきだろう。事実、こうしたシモンの態度は、テキストのさらなる読み直しを読者・研究者に勇気づけるものである。前述した「La Revue des Lettres Modernes」のシモン特集号は、その副題に「失われた指示対象 (référent) を求めて³¹⁾」を掲げている。このタイトルが、1971年のシンポジウムの問題提起とラディカルに対立するものであることは言うまでもない。

従って、1995年に発表された“公園”の「S.」の省察には、シモン研究そのものに向けた批評性が、二重化、三重化されて込められているのだということには、とりあえず注意を払っておく必要がある。

ちなみに、“公園”は、現在未発表の小説の一部を、予告的に抜粋したもの (extrait) とある。とするなら、次回作は着実に用意されているものと考えてよいのだろうか。我々としては是非それを待ちたいと思う。

(付記：本稿校正中に、本年度アグレガシオ (中・高等教育教授資格試験) の現代文学の課題として、シモンの『フランドルへの道』が選出され、また、パリ第7大学DEAにおいて、1997年-1998年、「ゾラからクロード・シモンへ：社会学批評の諸問題」が開設されることが発表となった。)

註

- 1) Claude SIMON, *Photographies*, Maeght, Paris, 1992.
- 2) Jean DUBUFFET et Claude SIMON, *Correspondance 1970-1984*, L'Echoppe, 1994.
- 3) "Cher Kenzaburô Ôe", in *Le Monde*, jeudi 21 septembre 1995.
- 4) Claude Simon, "Les jardins publics(extrait)", *Les sites de l'écriture, Colloque Claude Simon, Queen's University*, textes réunis et présentés par Mireille CALLE-GRUBER, Librairie A.-G. Nizet, Paris, 1995, p.23-37.
- 5) Claude SIMON, "Lecture publique d'une pièce de théâtre. Fragment d'un texte", in *L'Infini*, n°56, hiver 1996, p.3-10.
- 6) *Nouveau Roman : hier, aujourd'hui*, 2 volumes (I. Problèmes généraux, II. Pratiques), direction Jean RICARDOU et Françoise van ROSSUM-GUYON, U.G.E., coll.10/18, Paris, 1972. ちなみに、「ストラスプールのシンポジウム」とは、1970年にストラスプールで開催されたシンポジウム「Positions et oppositions sur le roman contemporain」を指す。
- 7) *Les sites de l'écriture*, op.cit., p.31.
- 8) *ibid.*, p.31.
- 9) Claudette ORIOL - BOYER, *Nouveau Roman et discours critique*, Ellug, Université Stendhal Grenoble 3, 1990; p.77.

- 10) *ibid.*, p.78.
- 11) BRUNEL, BELLENGER, COUTY, SEILLER, TRUFFET, *Histoire de la littérature française*, Bordas, 1972., PERRU-LAUNAY, *Thèmes et Réalité, L'univers de l'écrivain*, Hachette, 1973. など。
- 12) Françoise BAQUÉ, *Le «Nouveau Roman»*, Bordas, 1972., BOTHOREL, DUGAST, THORAVAL, *Les Nouveaux romanciers*, Bordas, Études, 1976. など。
- 13) LAUFER, MONTCOFFÉ, *Le roman. Le récit non romanesque. Le cinéma*. Nathan, 1975., BRIET, BRIGHELLI, RISPAIL, *Littérature 2. Techniques*, Magnard, 1987. など。
- 14) Roger-Michel ALLEMAND, *Le Nouveau Roman*, Édition Marketing S.A., «ellipses», thèmes et études, 1996, p.3.
- 15) アルマンは、ヌーヴォー・ロマンが自発的な文学グループ (École littéraire) ではないことを示すため、「動体 (mouvance)」という語を使用している。
- 16) *Le Nouveau Roman*, op, cit., 29-30.
- 17) *ibid.*, p.29. スリジエのシンポジウムが「ヌーヴォー・ロマン作家」たちの間の亀裂を顕在化したことを解説した章のタイトルを、アルマンは「内部爆発」としている。
- 18) ここでは、原則的に72年以降審査された博士論文がデータ・ベース化されているCD-ROM「Doc-Thèses」を基に算出した数値を示す(1997年4月現在)。論文が複数の作家を扱っている場合は、各々の作家について一本ずつ作成されたものと見なし、数値を重複させた。ちなみに、一つの目安として1992年に審査された博士論文総数を専門別に挙げると、「言語学：183本」、「比較文学：42本」、「フランス文学：159本」である(Michel BEAUD, *L'Art de la thèse*, Éditions La Découverte, Paris, 1996, p.138-139. 1994年調べ)。
- 19) アルマンは、1959年、出版社ミニユイ (Minuit) 前のベルナル・パリシー通りで撮影された、ヌーヴォー・ロマン史上伝説的な写真に姿を見せる7人と、そこに不在のピュートル、デュラス、リカルドゥーの3人を選択したと説明している。
- 20) 同じくCD-ROM「Doc-Thèses」による数値。
- 21) *Critique*, «La Terre et la guerre dans l'œuvre de Claude Simon», n°414, novembre 1981.
- 22) 例えば, Patrick LONGUET, *Lire Claude Simon. La polyphonie du monde*, Minuit, coll. «Critique», 1995.
- 23) 例えば, Jacques ISOLÉRY, «Entre masculin et féminin : le schème de l'impassible», in *Critique*, n° 584/585, janvier - février 1996, p.36-53., Michel THOUILLOT, «Guerres et écriture chez Claude Simon», in *Poétique*, n° 109, février 1997, p.65-81. など。
- 24) Henri MICCIOLLO, *La Jalousie d'Alain Robbe-Grillet*, Classique Hachette, 1972., Gérard DU ROZOI, *Les Gommages. Profil d'une œuvre*, Hatier, 1973. など。
- 25) Nathalie PIÉGAY-GROS, *Claude Simon. Les Géorgiques*, P.U.F., coll. «Études littéraires», 1996.
- 26) 「Apprentissage Claude Simon : plaisir de lire et approches théoriques」。講師は、1994年、サロート、パンジェ、ピュートルなどを扱った博士論文を提出しているB.ブロック (Béatrice BLOCH)。
- 27) Guy NEUMANN, «Écrire avec Claude Simon», in *Texte en Main (TEM)*, Édition L'atelier du texte, Librairie de l'Université, Grenoble, n° 7, hiver 1988-89, p.99-108.
- 28) *La Revue des Lettres Modernes*, *Claude Simon 1, à la recherche du référent perdu*, textes réunis par Ralph SARKONAK, 1994.
- 29) «Maurice Merleau-Ponty, Notes de cours «Sur Claude Simon»», présentation et transcription par Stéphanie MENASE et Jacques NEEFS, in *Genesis*, n° 6, 1994, p.113-165.
- 30) Anthony Chael PUGH, «Claude Simon et la route de la référence», in *Revue des Sciences Humaines*, Presse de l'Université de Lille III, n° 220, octobre-décembre 1990.
- 31) 註28)参照。